

酒類ガイドライン遵守推進本部だより

ほろにかが

平成27年4月14日
全国卸売酒販組合中央会
酒類ガイドライン遵守推進本部

「反省」

委員 荒木 章

戦後70周年の節目の年にあたり、様々な記念事業・イベントが開催されています。これは、大きな過ちを反省し、戦争の悲惨さ、平和の大切さ、二度とあってはならない原爆を風化させずに、語り継ぐためです。

酒類産業の戦後は、10年前の2005年であったはずですが。ビールの建値制度を廃止し、オープン価格に移行しました。メーカー・卸・小売が新しい時代を夢見て、消耗戦に終止符を打つために、不退転の決意で臨みました。二度と不毛な争いをしないと誓いました。

テキストは平成18年の「酒類に関する公正な取引のための指針」。合言葉は「量から質への転換」。ご当局の強い後押しもあり、業界全体が健全取引に大きく動きました。

そんな中、業界のために大きな犠牲を払った卸があったことを、私たちは決して忘れてはなりません。結果、目標には至りませんでした。メーカー・卸・小売ともに業界全体が大きく改善できました。

しかし、昨今の状況を見ると、再び不毛の戦いに戻ろうとしています。

小売業は南から北上しているDS・ドラッグ。北から南下するドラッグ・SM。価格競争は業態の垣根を越えてエスカレートするばかりです。メーカーは相変わらずシェア競争と量の追求。卸も帳合獲得競争に明け暮れ、経営を悪化させています。

私たちは過去の反省を生かし切れていません。平成27年2月国税庁の公表資料「酒類取引実態調査実施状況」(平成25.7月～平成26.6月)によると、公正なルール(合理的な価格設定をしていない)に即していない取引が98%と多数認められました。しかしフォローアップ調査では多くが改善されています。

自ら誓ったことを自ら破ってしまう。しかし背中を押されると軌道修正できるのです。再び暗黒の時代に戻してはなりません。まだ可能性はあります。

ジェームス・アレンも道元も坂村真民も同じことを言っています。「強く思い続けたことは必ず実現する」。

私たちは今一度、健全な公正取引・健全経営を強く念じ、行動することが重要です。